

## ケアの実践とその価値 : < 共同研究 : 心配と係り合いについての人類学的探求 >

著者	西 真如
雑誌名	民博通信 Online
巻	170
ページ	22-23
発行年	2022-09-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00009957">http://doi.org/10.15021/00009957</a>

# ケアの実践とその価値

西 真如

小説『コンビニ人間』の主人公である古倉さんには、コンビニの声が聞こえる。店の棚を整え、客の動きに気を配り、店内の音に敏感に反応する彼女は、そのことを通して自分が世界の一部であるという実感を得る。ところが古倉さんには妹がいて、姉がふつうの30代半ばの女性とは違うことを心配している。お姉ちゃんはいつになったら「治る」のかと問う妹のことばに古倉さんは戸惑う(村田 2016)。

私たちは日常のさまざまな場面で、いつも誰かを、あるいは何かを心配し、気がつけば「係り合い」になっている。その意味でケアは、ありふれた行為である。その一方で古倉さん姉妹のように、姉にとって正しい生き方が妹にとっては病いであり、妹の心配が姉には意味不明であったりする。私たちは、ケアする関係が容易には成立しない世界に生きているようにも思われる。

私たちはどのように行為すれば、誰かを、あるいは何かをケアしていることになるのだろうか。ケアが成立していると思われるとき、それはどのような価値に支えられているのか。共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」では、この問いを解きほぐすための議論を重ねてきた。この問いには、少なくとも次の3つの側面から接近する必要があると思われる。

## ケアの価値

第一に、ケアの行為を裏付ける価値は何なのだろうか。ケアは定義上、倫理的な行為とされるが、その行為の道徳的な正しさが何に由来するのかわかならずしも明白ではない。ケアについての従来の議論は往々にして、行為者が適切な意図を持ってさえいればケアの関係が成立するという前提に寄りかかってきた。しかしタイ北部で高齢者ケアに関する民族誌調査をおこなったフェリシティ・オリノは、行為者の感情や意図や信念とケアの行為とを切り離して考えることができるはずだと主張する。民族誌的探究とは、慣習化された行為の中に道徳的な生の支えを見いだすことではなかったか。日常的な介護は、一連の行為の繰り返しであり、その意味で儀礼的である。そしてタイにおける高齢者ケアの儀礼は、仏教的な功德やカルマ(業)といった概念と結びついたものである(Aulino 2019)。ケアする者たちが、その行為の価値が自明であるかのようにふるまえるのは、個人としての行為者が正しい意図や目的を有しているときではなく、その行為の徳

性が人びとの間で共有されているときなのである。

## 家父長制と新自由主義

第二に、ケアの行為とその価値が、どのような制度や権力関係の中に置かれているのかを問う必要がある。たとえばオリノの民族誌においては、ケアの儀礼はタイにおける国民統合と共同体、格差と構造的暴力といった文脈の中に位置づけられる。タイの人びとは、自らが背負う業に報い功德を積むために貧者を対象としたボランティア活動に従事する。だが同時に、そもそも富める者と貧しい者の格差があるのは、単に各人の背負うカルマの仕業だと片づけてしまうこともできる。業はこのようにして、タイ社会の政治的・経済的ヘゲモニーに加担するのである(Aulino 2019)。他方で『コンビニ人間』の世界では、男でも女でもないコンビニ店員であろうとする古倉さんを招き入れる新自由主義経済と、女性は既婚者(でなければ正社員)の地位によってしか持続的な幸福を手に入れることができないと考える妹を包摂している家父長制資本主義の世界とがせめぎあっているようだ。今日の世界において、ケアしケアされる者の経験は、家族、労働、福祉に関する諸制度、およびそれらの生みの親である新自由主義や家父長制といったイデオロギーと無関係に描き出すことはできない。

## 人間以上の世界

第三にケアは、人間と人間ではない生物やモノを含む諸アクターの相互行為として理解される必要があるだろう。マリア・プイグ＝デ＝ラ＝ベラカーサは、フェミニストのケア理論と環境人文学とを理論的に架橋した著書において、人間以上の世界におけるケアについて論じている(Puig de la Bellacasa 2017)。たとえば有機農業の実践者は、土壌中のミミズの心配をするであろう。ミミズもまた、土壌を豊かにすることによってケアの行為者となっている。

もちろんミミズは、土壌を肥やす意図をもってそうしているのではない。ベラカーサの理論的な立場はオリノとは異なる点も多いが、しかしケアの倫理を人間の意図に還元することに明示的に反対しているという点では、両者は一致しているように思われる。ベラカーサにとって、ケアの実践は豊かさ(abundance)の価値に結びついている。多様な種が互いにケアし合うことで、私たちの世界は繁栄するのである。

## 西 真如 (にし まこと)

広島大学大学院人間社会科学研究所准教授。専門は医療人類学。共編著書に『新型コロナウイルス感染症と人類学』（水声社 2021年）、論文に「あの虹の向こう—大阪市西成区の単身高齢者と世代・セクシャリティ・介護」『ケアが生まれる場—他者とともに生きる社会のために』（ナカニシヤ出版 2019年）など。



公園の遊具の前に張り巡らされた立ち入り禁止のテープ。ふだんここで遊んでいた子どもたちはどう過ごしていたのだろうか。ウイルスのような厄介者がいる世界で生きていくことは私たちの宿命だとしても、国民の生命を守るために要請された行動制限のコストは、誰がどのように負わされてきたのだろうか。（2020年6月7日、京都市左京区、筆者撮影）

そこでは、ケアの行為者たちは自ら意図してその価値の実現に参加するというよりも、ある種の義務（obligation）としてそれをおこなうよう方向づけられている。たとえば有機農場の環境は土壌中のミズに対して、豊かさをつくりだす実践への参加を義務づけるのである。環境人文学的なケアの実践は、豊かさをつくりだす人間以上の世界の行為者たち相互の「係り合い」の中にある。

とはいえ、人間以上の世界における出会いや結びつきが常に善いものだと考えるべきではない。第一に、生態系の多様性に寄与する種の中には、人間の生存に都合の悪い者たちもいる。ウイルスなどの病原体や寄生虫といった「厄介者」との共存が避けられないにしても、往々にして貧者や少数者がそのコストを負わされるような社会構造に目を向ける必要がある。したがって第二に、ケアの実践がどのような価値に奉仕させられているのかを改めて考える必要がある。古倉さんに「コンビニの音が聞こえる」というのは、利潤によって方向づけられた環境が、彼女に棚や客のケアをするよう義務づけるからだろう。彼女の気づかいがどれほど彼女自身とコンビニと顧客にとって都合のよいものであったとしても、それは同時に格差や暴力を再生産する社会のヘゲモニーに奉仕するものなのである。

## 心配と係り合いのエスノグラフィ

以上が、本共同研究における議論の成果の要約である。共同研究の参加者は現在、議論の成果を踏まえた論文を執筆中である。成果論文のうちいくつかは、おもに理論的な貢献に絞った内容になり、そのほかはフィールドの経験を中心に据えたエスノグラフィとして書かれる予定である。エスノグラフィ論文には、ウガンダ、エチオピア、パプアニューギニア、スリランカ、インドネシア、カンボジア、ベトナム、日本、そしてオーストラリアといった国々の事例が含まれ、子どもの養育や高齢者の介護、家族やパートナー間の暴力と抑圧、あるいは人間以上の世界におけるケアといった問題に取り組む予定である。

### 引用文献

- 村田沙耶香 2016『コンビニ人間』東京：文藝春秋。  
Aulino, F. 2019 *Rituals of Care: Karmic Politics in an Aging Thailand*. Ithaca: Cornell Univ Press.  
Puig de la Bellacasa, M. 2017 *Matters of Care: Speculative Ethics in More than Human Worlds*. Minneapolis: University of Minnesota Press.